

**留学先国名** : カナダ

**留学先学校名** : サスカチュワン大学

**留学期間** : 平成 26 年 8 月 30 日 ~ 平成 30 年 5 月 20 日

カナダで 2 年目を迎えて、去年持っていたサスカチュワン大学やサスカトゥーンの生活環境の感覚が自分にとって大幅に変わったと感じます。カナダでの生活に慣れたのもありますが、それよりも去年はあまり注目する余裕のなかったサスカトゥーンの姿に気づき、新しく探索することが多くなりました。

大学の授業に関してはさらに具体的な内容に入り、もっと時間を効率よく使う必要を感じました。私の専攻の生物学に関しては細胞学や人間の解剖学の授業を取り、私が将来仕事としてしたいことに近い内容を勉強するので授業内容を以前より楽しむようになりました。去年と比べて気づいたことの一つとしては、課題や試験に向けての勉強が以前より上手いくことが多くなりました。授業内容と関連する資料の調査や、情報を効率的に取り入れることもおおむね容易にできるようになりました。生物学の授業のほかにも今学期も選択科目として脳科学、具体的に知覚の働きについての授業を取りました。去年取っていた脳科学の授業と同じ講師が教えている授業で、以前その講師の教え方がとても分かりやすく興味を引くと感じたので、脳科学ならこの講師とのほうが楽しく学べると思い選択しました。この授業を通して人の脳をもっと詳しく探索することができ、知識がさらに深まったと感じます。日常生活でも授業で学んだことを活かすことが多くなりました。例を上げると、ベンハムの独楽というおもちゃを使った実験を行うことで、人間の視覚の働きについて理解することが出来ます。元は白黒のおもちゃの模様が、回せば赤、黄色、青の色が見えてきます。簡単にまとめると、これは視覚系の経路が二つ（色を認識する経路としない経路）に分離し、その経路の速度の違いによって、色のないところに色が現れるように見えてきます。このおもちゃから現れる視覚系の特徴について自分で調べ、発表をしました。だから、よっぽど興味深いと感じ、実験を通して脳の特徴を発掘したいとさらに思いました。もう一つの選択科目としては製版の授業を受けています。この授業ではシルクスクリーン印刷法やリソグラフィーという様々な製版法を学ぶので、大幅な芸術スタイルを活かせる環境です。今年の夏に絵画や写真の投影に興味を持つようになり、この授業を通してもっと芸術を探索したいと思い、受けました。九月にカナダに戻り、この授業をきっかけとして多様な芸術に取り組んでいる人たちと知り合いました。その人たちから写真や製版のコンクールについて聞き、十一月頃に自分の作品をいくつか出品し、また三月にもう一度出品する予定です。このような形で、大学とは少し別な環境で居場所を見つけることができ、さらにサスカトゥーンでのネットワークの幅を広げていくことが可能になりました。

勉強面では、一年前と比べて進歩したと感じます。しかし、今年で一番関わって良かったと思うのは大学の博士の脳科学研究所の一部委員として活躍することです。先学期に取ることです。先学期に取ここで、その授業の講師の研究について尋ねたところ、生徒からの手助けを進んで取り入れていると知りました。このようにして、今年の 9 月から他の四人の生徒と共に博士の心理物理学の研究所で働くことになりました。具体的な内容としては多感覚統合の研究であり、視覚と聴覚がどの程度や脳内のどこで統合さ

れているか、パソコンでのプログラムを通した実験で結果を得ます。参加者に実験に参加してもらった際、その参加者の実験に対しての知覚と聴覚の反応を記録します。参加者数が十人ほどになると、記録した結果を分析し、結果が意義深いか判断します。もし、結果が仮説とあまり一致しない場合は実験を修正します。私の責務としては、参加者が研究室に到着すると、実験内容を説明し、プログラムを開始させます。実験後は参加者の結果をまとめます。参加者が増えていくと結果の傾向を判断し、毎週研究室のみんなが集まり、得た結果を解釈します。二、三か月してから納得のいく結果を得た場合は、実験内容の要約を全国規模の脳科学会議に提出し、もし受け入れられた場合は生徒という立場から発表することができます。生徒としてこのような機会に触れ合うのはなかなかないと思うので、出来るかぎり活かしたいです。一年前の自分と比べれると、最近は自分のことをもっと理解し、自分のペースで勉強や大学外の活動に取り組んでいるように感じます。ある程度の失敗を恐れることも大幅に少なくなり、自分のことを必要なときは許すこともできるようになってきていると思います。自分の精神を新しいことに挑戦するようぐいぐいと押していくことも大事ですが、あまりにもストレスをかけると力つきてしまい、伸びる余裕もなくなっていくと思います。だからこそ自分に厳しくし、しかし時には自分の弱みを分かってあげることが十分大事だとこの頃気付いてきています。